２０１２／１０／２１　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：わたしを愛するか２
聖書箇所：ヨハネの手紙第一　３章１８節

「あなたはわたしを愛するか？」と、この質問こそ私たちがいつも自らに問いかけ続けなければならない質問だと思います。主がペテロにこの質問をされた時、主はことばだけでなくてことば以上のものを求めておられたことは明らかです。主はただそのように口で言うだけでなく、ペテロがそのようにすべてをもって主を愛することを望んでおられたのです。前回、私たちが学んだように、愛する主を三度否んだ後、ペテロは「ここにいるすべての弟子たちよりもあなたを愛します。」とは告白しませんでした。告白できなかったのです。それは自分自身の信仰の弱さ、また、罪深さを強く認識したからです。しかし、ペテロは間違いなく主を愛していました。彼は心から主を愛していました。そのように告白しなくても、彼が主を愛していたことは明らかでした。なぜ、それが分かるのか？彼の生き方です。彼は主によって命じられたように主の羊を飼いました。彼らを養い、彼らを牧しました。しかも、彼はいのちがけで主に従いました。かつてはプライドに溢れ、自分自身に自信を持ち、人々を見下していたこのペテロ。「私は死にまで従う」と豪語しましたが、彼は失敗しました。しかし、その後悔い改めたペテロは、確かに彼が言ったように死にまで従い通しました。忠実な奴隷として彼は従い続け、ローマ皇帝ネロによって殉教したと言われています。最後まで主に従い通したと。

ですから、みことばは私たちに言うのです。主を愛していることは私たちの行ないによって明らかにされると。この主とペテロのやり取りを記したヨハネは、愛に関する大切なことを私たちに教えてくれます。今日、私たちがテキストとしてごいっしょに学んでいきたい聖書の箇所はヨハネ第１の手紙３章１８節です。**「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」**、ヨハネはここで**「愛そうではありませんか」**と言いました。実は、このことばは激励を意味します。彼は「いっしょに主を愛そう！」と読者たちを激励するのです。その愛に関して、彼は二つのことを言います。「間違っている愛」と「正しい愛」です。うわべだけ、形だけで心が伴っていない偽りの愛と、行ないの伴った心からの愛を彼は上げています。間違った愛は「ことばや口先だけで愛する愛」です。心が伴っていないうわべだけの愛、形だけの愛です。そして、正しい愛に関しては**「行ないと真実をもって」**、行ないの伴った心からの愛です。

ヨハネはことばではなく行ないをもって愛するようにとクリスチャンを激励します。そして、彼がここで激励している愛とはどのようなものでしょう？Ｉヨハネ４：２０－５：２をご覧ください。**「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。5:1 イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。:2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。」**、ヨハネがここで読者たちに激励を与え、いっしょに愛そうと言ったその愛は「兄弟を愛する」ことでした。兄弟姉妹たちを愛そうと言うのです。なぜ、ヨハネがそのようなことを言うのか？それは「神を愛すること」と「兄弟を愛すること」は実はいったいだからです。それらを切り離すことは出来ないからです。不可分なことだと教えようとするのです。ですから、兄弟を愛することはまさに主を愛することであるとヨハネはここで伝えるのです。

今日のテキストである３：１８を見ると**「行ない…をもって愛そうではありませんか。」**とヨハネは行ないを強調しています。ことばだけでなくて行ないをもって愛そうと言います。皆さん、どうして行ないがそれ程大切なのでしょう？優しいことばをかけるだけではどうして不十分なのでしょう？なぜ、行ないが伴わなければダメなのでしょうか？それはこの行ないが救いと関連しているからです。ヨハネは次のように言っています。「兄弟を愛するという良い行ないはその人が神を心から愛していることの証拠であり、また同時に、その人が救われていることの証拠でもある。」と。ヨハネが言いたいのはそういうことです。兄弟を愛している人はその行為によって神を愛していること、そして、その人が救いに与っていることを証しすると言うのです。逆説的に言えば、兄弟を愛さないという悪い行ないは、その人が神を心から愛していないことの証拠でもあるし、また同時に、その人が救われていないことの証拠でもあると。だから、行ないというものをヨハネは強調しているのです。お分かりのように、行ないによってどんな善行によっても我々は救いに至ることはありません。でも、救われた者たちのうちからは善

行が生まれ出て来るのです。それはみことばが繰り返し私たちに教えることです。そして、ヨハネはここでもそのことを教えるのです。

今日、私たちが見ていく「兄弟を愛さない」という悪い行ないに関して、ヨハネはこのＩヨハネで旧約聖書のある一人の人物を例えに用いています。カインです。今からこのみことばを見ていきますが、その前に一つ考えていただきたいことは、前回から見ているように、神を愛すること、我々のうちなるすべてをもって心から神を愛することも、また、兄弟を心から愛することも、正直言って難しいでしょう？難しくはありませんか？神が望んでおられるように神を愛すること、神が愛してくださったように神を愛すること、また、兄弟を愛することは易しいことではありません。それは皆さんもよくお分かりになっているでしょう。ですから、今日、私たちはどうすれば良いのかを見ていきます。そのために、今朝は三人の人物を見ていきます。ヨハネはカインを上げていますが、彼と非常によく似た人物が他にも記されています。そして、その三人の人物を見ることによって、彼らの行動に至らせるその思考の過程というものをごいっしょに見ていきます。なぜ、こういう行動に至ったのか？どのような考えがその背後にあったのか？そのことを私たちは見ていきます。それによって、人間の、あなた自身の罪深さ、そして、弱さを再認識することが出来るからです。そのために見ていきます。二つ目は、あなたが同じ失敗を繰り返さないための教訓とするためです。彼らの失敗を見て私たちがそのようなことを繰り返さないためです。

☆「兄弟を愛さない」という悪い行ないに関して

Ａ．ことばや口先だけの愛

もう一度今日のテキストＩヨハネ３：１８を見てください。**「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、」**とあります。ことばでは神に対して「はい」と言っているのが、心では「いいえ」というそのような人のことです。兄弟たちに対して全くあわれみの心を持っていない人のことです。そして、その実例としてヨハネはカインを上げました。

１．その実例　：　カイン

３：１２に**「カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょう。自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです。」**と記されています。カインは悪い者の見本です。彼はここで見るように「ことばや口先だけで愛する者」だったのです。心が伴っていなかった。そのことを見ていきます。もちろん、カインのことを考えるためにはカインの話が記されている箇所を見なければいけません。創世記４章です。ご存じのように、兄のカインと弟のアベルはそれぞれ神の前にささげ物を持ってやって来るのです。４：２－９**「:2 …アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。:3 ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。:4 また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。」主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。:6 そこで、主は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。:7 あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行なっていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。:9 主はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのでしょうか。」**、みことばはこのように教えています。カインの問題点はいったい何だったか？ひと言で言うなら、彼は利己的だったのです。他人のことなど全然顧みようとしない、自分のことしか考えていない、自分の利益だけを追求しようとしている、そのような人物だったのです。自己中心的な自己本位な人物でした。そのことは彼自身の行動が明らかにします。このカインの行動に至るまでの過程を検証していきましょう。

１）その問題点　：　検証

（１）５節「だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。」、

二人がささげ物を持って来たときに神はアベルのささげ物を受け入れ、カインのささげ物に目を留めることなく受け入れもしなかったのです。

（ａ）行動＝顔を伏せる

まず、彼がどんな行動をとったのか？彼のとった行動は**「顔を伏せ」**るという行動でした。この行為は偶然なされたのではありません。

（ｂ）理由＝ひどく怒り

その行為に至る理由があるのです。彼は**「ひどく怒り」**と書かれています。彼のうちにある「怒り」

がこのような行動を生み出したのです。ですから、カインの行動を見る時に、彼の心の状態が明らかにされます。

（ｃ）原因＝カインとそのささげ物には目を留められなかった

では、なぜ彼は怒ったのか？その怒った原因です。先程から見ているように、みことばは彼のささげ物を神が受け入れてくださらなかった、でも、アベルのささげ物は受け入れられたとあります。それでカインの心の中に嫉妬心が芽生えるのです。妬みです。自分のものよりも弟のいけにえが主に喜ばれた。自分のメンツが潰されたのです。カインは当然自分のささげ物は受け入れられると期待していました。ところが、自分の期待していた結果が得られなかったから、弟に対して嫉妬を抱くのです。

ですから、こうして見ると、行動に出るには理由があるし、そこには、原因があるということです。そのことを繰り返し見ていきます。そのようにして人間は行動していくのです。

（２）８節「しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。」

ここには、怒りという感情が支配した人の姿が描かれています。

（ａ）心を感情が支配することの恐ろしさ

そのとき次のようなことが起こります。一つは「人の話を聞けない、人の話しを聞かない」ことです。６－７節を見てください。カインに対してだれが話をしていますか？主なる神が話をしておられます。**「そこで、主は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。…」**、**「憤っている」**は先ほどの「怒り」と同じヘブライ語が使われています。**「なぜ、顔を伏せているのか。」**、つまり、その行為がどのような心から出て来たのか、神は見ておられるのです。ですから、カインが憤っていることは聞かなくても行動を見たときにその心に怒りがあることを神は見抜いておられるのです。７節**「あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行なっていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」**、神はここでカインに大切なレッスンを教えようとするのです。確かに、今回のささげ物は受け入れられなかった。なぜなら、ささげる人もささげる心も正しくなかったからです。だから、神は**「あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。」**と言われます。アベルがそうだったように…。アベルのささげ物は彼の心を現わしていました。どれ程神を愛していたのかはその行為、その犠牲が明らかにしました。

だから、ここで主はカインに言うのです。「あなたも同じことをするなら受け入れられる。」と。そして、神はここでカインに対してチャンスを与えたのです。神に対して正しくなるためのチャンスです。神に対して心を開くためのチャンスです。そして、８節**「しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。」**

（ｂ）「しかし」

「しかし」ということばで始まります。つまり、神はこのようにカインに手を差し伸べているにも関わらず、カイン自身がその手を拒んだということです。主なる神が話しかけておられるのに、カインはそれを聞いていません。感情的になった人はその通りです。相手が何を言っても聞いていないのです。皆さんも経験あるでしょう？怒っている人の所に行って何を話してもその人は聞こうともしません。非常に恐ろしい姿です。そのように感情というのはすごい力を持っているのです。まさに、この時のカインはそうでした。

（ｃ）愚行を行なう

怒りという感情に心を支配されていたカイン、彼が取った行動を見てください。愚行を行なったのです。彼は「弟を殺す」という非常に愚かなことを行なうのです。カインの妬み、そして、自分のプライドが傷つけられたことによって彼が抱いたその怒りは、実の弟を殺害するという恐ろしい結果を生み出しています。

ですから最初に話したように、カインの問題は「利己的」だということです。今、私たちはその姿を見て来ました。利己的な人物を見て来たのです。彼は弟のいのちよりも自分の面子の方が大切だったのです。だから、ヨハネは今日のテキストに戻って、Ｉヨハネ３：１２に**「彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。…」**と書いています。彼は悪い者だと言うのです。ヨハネのことばを使って説明するなら「カインは神の子ではなくて悪魔の子であった」ということです。そのことがこの行為によって明らかにされたということです。恐ろしいことです。神の子か悪魔の子か？人間はどちらかに属します。ここにいらっしゃる多くの皆さんは神の子でしょう。なぜなら、イエス・キリストの救いをいただいて罪赦されたからです。しかし、悲しいことにそうでない多くの人たちは悪魔の子であるとみ

ことばは言います。救われていない人たちの特徴は「自分さえよければ良い」というまさに利己的な生き方をすることです。

（ｄ）利己的な人の特徴

パウロが救われていない人の特徴についてこのように言っています。テトスへの手紙３章３節**「私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快楽の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。」**、パウロはここに利己的な人の特徴を述べています。**「悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。」**と。

・人の不幸を喜ぶ＝自分が不幸になることは絶対に許されない。でも、人が不幸になること関しては関心がないし、却って、その不幸を喜ぶのです。

・人の幸せを妬む＝「なぜ、あの人ばかり…」と。

・人に憎しみを抱く＝

・人を赦すことをしない＝

（ｅ）利己的な人の特徴の原因

・自分を一番に愛しているから

利己的な人を考えたとき、それは自分を一番愛している人です。自分を一番大切に思っている人です。そのためにこの人は愛する自分が傷つけられた場合、その相手に対して怒りを覚えるのです。愛する自分が傷つけられた。そうするとリベンジ、復讐をしようと考えます。ですから、人から言いがかりをつけられた時、ひょっとしたらしばらくは落ち込んで悩んでいるかもしれない、でも、そのうちにこのような思いが出て来ます。「なぜ、あの人にそのようなことを言われなければならないのか！」と。徐々に怒りが芽生えて来ます。そうするとその人に対する悪口が出て来るのです。周りの人に言うのです。「ちょっと聞いて…」と。そして、その人物に対する非難中傷が始まっていくのです。心当たりがありませんか？残念ながら、人間の罪深さはこのようなことを為してしまうのです。

また、自分が期待している扱いを受けなかった時はどうですか？人によってはこのような思いが出て来ます。「いったい、私のことをだれだと思っているのか？」と。そして、怒りを抱いてしまいます。また、自分の考え、主張が受け入れられないとき、憤りを覚えそれが人に対する非難になっていきます。結局のところ、こうして見ていくと、それは自分の怒りを晴らしたいだけです。人の行為に対して自分の怒りを晴らしたい。みことばは「それは愛ではない」と言います。それは私たち信仰者に神が望んでいる愛ではないのです。

人の悪口を言ったり、人を非難したり、人を赦さなかったり、すべて、それは愛ではありません。なぜなら、パウロは愛の定義に関してこのように言うからです。Ｉコリント１３：４－５**「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。:5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、」**と。だから、神が望んでおられることに私たちはいかにかけ離れた存在であるかということに気付きます。そのような中に私たちは生まれ、そのような生き方をし、そして、その中から私たちは救いへと導かれたのです。でも残念ながら、私たちは気をつけていないとそのような生き方を平気で行ってしまう可能性がまだあるのです。今朝みことばを読んでいるときソロモンのこのみことばを見つけました。**「軽々しく心をいらだててはならない。いらだちは愚かな者の胸にとどまるから。」**、伝道者の書７：９のみことばです。カインは妬みから怒りを持ちました。みことばはそれは愛ではないと教えます。

２．その実例　：　サウル

また、もう一人の人物を紹介します。カインと同じように愛する者を殺そうとした人物がいます。彼の名前はイスラエルの初代の王サウルです。

Ｉサムエル１６：２１：ここではサウルとダビデの関係をこのように教えています。**「ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルは彼を非常に愛し、ダビデはサウルの道具持ちとなった。」**、サウルはダビデを非常に愛したのです。

Ｉサムエル１９：１：**「サウルは、ダビデを殺すことを、息子ヨナタンや家来の全部に告げた。しかし、サウルの子ヨナタンはダビデを非常に愛していた。」**、サウルはダビデを殺すことを家来たちに告げたというのです。そして、実際にダビデのいのちを狙うのです。ですから、この１６章と１９章の間に何かが起こったのです。サウルを変えるような何かの出来事があったのです。皆さんがよくご存じの出来事が１７章に記されています。ダビデとゴリヤテの戦いの記事です。ダビデがゴリヤテに勝利したことです。

Ｉサムエル１８：６－９：そして、１８章を見ると、その戦いに勝利を得たダビデたちが戻って来るのですが、このように書かれています。**「ダビデがあのペリシテ人を打って帰って来たとき、みなが戻ったが、**

女たちはイスラエルのすべての町々から出て来て、タンバリン、喜びの歌、三弦の琴をもって、歌い、喜び踊りながら、サウル王を迎えた。:7 女たちは、笑いながら、くり返してこう歌った。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」:8 サウルは、このことばを聞いて、非常に怒り、不満に思って言った。「ダビデには万を当て、私には千を当てた。彼にないのは王位だけだ。:9 その日以来、サウルはダビデを疑いの目で見るようになった。」、いったい何が原因だったのか、サウルの怒りです。実は、ここで使われている「怒り」ということばも、創世記４章で見た「怒り」と同じヘブライ語が使われています。

サウル王の殺意の原因も実は「妬み」でした。カインもサウルも口先だけで神を愛すると言いながら、心から神を愛していなかった者です。なぜなら、彼らは主に喜ばれることを行なおうとは考えていなかったからです。彼らの行動の動機は神への愛ではなく、すべては自分への愛です。初めに話したように、カインを見てもサウルを見ても、確かに、彼らは心から神を愛していなかったけれど、彼らがある行動に至ったその思考の過程というものは、残念ながら、私たちも持っています。私たちはいろいろなときに腹を立てます。そして、その感情が私たちを支配すると、私たちはとんでもないことを行なってしまったり、とんでもないことを口にしたりするのです。今、確かに私たちが見て来たのは心から神を愛していない人です。でも実は、神を愛している人の中にも同じことが起こっているのです。最後に紹介したい人物は「ヨナ」です。

３．その実例　：　ヨナ

皆さんもよくご存じのように、ヨナは主なる神から務めをいただきました。ニネベという町に行って、その町の人々に神のさばきが近いというメッセージを伝えるという務めでした。でも、その務めを受けた時に、ヨナはニネベではなくタルシシュの方へと行きました。その航海の途中に嵐に襲われましたが、ヨナはその理由を知っていました。自分の罪が原因であると。そして、船乗りたちに「私を捕えて、海に投げ込みなさい。そうすれば嵐が止むから。」と言います。その通りに海が凪になりました。海に投げ込まれたヨナがどのようなことを経験したのか？**「主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。」**（ヨナ書１：１７）。そして、その中でヨナは神の前に悔い改めるのです。**「主は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた。」**（２：１０）とあります。その後、ヨナはニネベに行って、ニネベの人々に神のさばきが近いことを告げるのです。**「ヨナは初め、その町にはいると、一日中歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。」と言った。」**（３：４）と。そこで、ニネベの人々は悔い改めました。そうすると神はさばきを下されなかったのです。

そのときに、ヨナは何をしたのか？４章に書かれています。１－２節**「ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、:2 主に祈って言った。「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです。」**、確かに、ヨナは神のことを知っています。恵み深いあわれみ深い方であり、罪の赦しを求めるなら赦してくださる神であると知っています。しかし、神がニネベの人々にあわれみを示されたときヨナは面白くなかったのです。ですから、**「ヨナは怒って、」**とあります。この「怒った」ということばも、今、私たちが見て来た「カインが怒った」、「サウロが怒った」と同じヘブライ語が使われています。同じように「怒った」のです。そのヨナに対して主はこのように言われます。４節**「主は仰せられた。「あなたは当然のことのように怒るのか。」**。

また、こんなことがありました。ヨナは町から出て町の東の方に座ってそこに仮小屋を作って、町の中で何が起こるのかと様子を見ていました。神は一本のとうごまを備えてくださって、それがヨナの上を覆うように生えさせてくださったのです。そうすると陰が出来たのです。その陰は心地良かったのです。ヨナは非常に上機嫌になりました。ところが、神は一匹の虫を備えられたのですが、その虫がとうごまを噛むことによってとうごまは枯れてしまったのです。４：８－９**「太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」:9 すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のことのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」**、また、「怒る」ということばが出て来ました。ヨナは怒りを覚えたのです

◎　ヨナはなぜ怒ったのか？　１，９節

（１）神のみこころが自分の考えと異なったから　　１節

１節**「ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、」**、ヨナはニネベの人たちが滅びることを望んでいたのです。その人々を神があわれむと言った時にヨナは黙っていられませんでした。

（２）自分の思い通りにならなかった　　９節

日陰を作ってくれていたとうごまが枯れて日陰がなくなってしまったときに怒りを持ったのです。これ幸いと思っていたらそのとうごまが枯れて日陰がなくなってしまった。すると彼は神に対して怒ったのです。

皆さん、このヨナのことを見ていると、「怒り」という思いをずっと持ち続けていると、その感情は大きな問題をもたらすということが分かります。ヨナ自身がそうでした。ヨナは２回に亘って**「死んだ方がましだ。」**と言います。４：３**「主よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」**、４：８**「彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」**、自己憐憫に陥っていくのです。「可哀想な私よ、こんなに大変な辛い目に遭っている！」と。そして、どんどん自分をあわれむのです。ヨナの問題は何だったのでしょう？ヨナはこのとき神のみこころに従うことが最善であると思っていません。彼自身は自分の考えに沿ってやることが最善だと思っています。自分の考えが最善であると。だから、自分の思い通りにならないから神に対して怒りを覚えたのです。あの魚の中で悔い改め、主によって生きながらえさせていただいたにも関わらず、彼は自分の思い通りにならないとその神に対しても怒りを持つのです。彼のプライド、まさに、ここに私たちが見るのは非常に高慢で思い上がった人物の姿です。

さて、私たちは三人の人たちの失敗を見て来ました。そして、私たち自身が彼らと同じ失敗を犯さないためにはどうすれば良いのか、そのことを考えてみましょう。

◎彼らの失敗から私たちが学ぶこと

（１）もう一度、主が私を救いへと招いてくださったときのメッセージを思い出すこと

主はあなたを救いへと導いてくださった、その救いのメッセージを思い出すことです。主はこのように言われました。**「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」**と、覚えておられますか？ルカの福音書９章２３節のみことばです（マタイ１０：３８、１６：２４にも同じことが記されています）。あなたがイエスを信じる時にあなたが主に誓ったことを忘れてしまっているかもしれません。忘れてはいけないのです！私たちは「すべての主であるあなたを私の主として信じて従います。」と誓ってその選択をしたのです。そのような決心をしたのです。私たちのこの主従の関係は変わらないのです。私たちの神は私たちの主人であり、私たちはその主人に仕える奴隷にすぎないのです。

でも、私たちがその主人に従っていく時に常に邪魔するものがあるのです。それは自分です。自我です。「私はこうしたい。私はこう考える。これは私の夢である。」というその自我が、主のみこころに従う歩みの妨げとなるのです。だから、イエスはそのことをご存じだったゆえに、**「自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」**と言われたのです。日々、私たちは自分を捨てることが必要なのです。自分を捨てて主のみこころに従おうとするのです。いつも私たちのうちにはその戦いがあるのです。自分のやりたいことをしたい、でも、神のみこころにも従いたい！だから、私たちは自分のやりたいことをみな捨てるのです。神のみこころが最善だから、そして、私たちはこの方に仕える奴隷だから、私たちはこの方が喜ばれることを選択していこうとするのです。そのことをすでにもうイエスは言われたのです。そして、私たちは「主よ、そのように私は生きていきます」とそのように選択をしてこの救いをいただいたのです。ですから、思い出さなければいけないことは、我々は自分の夢に沿って生きるために生きているのではないということです。神のみこころに沿って生きるために、今生きているのです。自分のしたいことをするために生きているのではないのです。主が望んでおられることを行うために生きているのです。自分を喜ばせるために生きているのではなく、主を喜ばせるために今私たちは生きているのです。自分をもっと愛するために生きているのではなくて、主をもっと愛するために生きているのです。

この世の中は「自分を愛するように」とカウンセリングをします。いろんなインターネットのサイトにもそのようなメッセージやカウンセリングがあちこちに見られます。残念ながら、それは世の中で行なうカウンセリングです。神が何と教えているか？みことばは何と教えているのか？みことばは「自分よりも神を愛するように」と教えます。なぜなら、聖書が教えている私たちの根本的な問題は「私たちは神よりも自分を愛する者だ」ということです。だから、みことばは私たちに「あなたは自分自身よりもわたしを愛するか？」と問い掛けるのです。一番大切な戒めは何でしたか？「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」です。そのために人間は造られたのです。しかし、残念ながら、その目的から外れて生きているのです。我々は神以上に自分を愛する者として生きているのです。思い出さなければいけないのです。神が何を望んでおられ、我々は神の前に何を誓ったのかということを。私たちはこの主なる神の奴隷として、この方を喜ばせることを生き甲斐として歩む

者となったのです。だから、私たちが彼らの失敗を見て学ばなければいけないことは、私たちはしっかりこの主に従うことが私たちの生き方であるということです。そのことを思い出すのです。

（２）主の愛を常に覚え続けていくこと

二つ目に、私たちがこの失敗から教えられることは「主の愛を常に覚え続けていくこと」です。私たちが自分自身に向けている目を主に向けるなら、そして、どれ程大きな犠牲で自分が愛されているかを見ることによって変わって来るはずです。私たちの問題は、神の愛に目を向けるよりも自分自身に目を向けてしまうことです。主の愛を覚え続けることです。

（３）主の助けをいただき続けること

結局そこです。私たちは神に助けをいただかなければいけないのです。神を愛することにおいても神の助けがいるのです。兄弟を愛することに関しても、当然、神の助けがいるのです。「主よ、そのように私は生きていきたいです。あなたが言われたように、あなたを心から愛する者として、兄弟を心から愛する者として生きていきたい！でも、そのためにはあなたの助けが必要です、助けてください！」と。

どうですか、皆さん？あなたの神への愛、また、兄弟への愛はことばだけ、うわべだけのものでしょうか？もし、違うなら、それを行ないで示しなさいと言われます。

◎いくつかのアドバイスを皆さんに差しあげます

（１）兄弟を愛しているなら、兄弟たちのために祈り始めること

そして、祈っていることをその人たちに伝えることです。つい最近ですが、私はミシガンのある教会からカードをもらいました。誕生日でもないのになぜカードが来たのかな？と思いました。そこにはこのようなメッセージがありました。「私たちはあなたとあなたの家族のために祈っています。」と、そして、教会員のたくさんの人々のサインがありました。いつも私が座っている横にそのカードを置いています。祈っていただいていることは、もちろん、皆さんも祈ってくださっていますが、大きな励ましです。それなら、皆さん、愛する兄弟姉妹たちに「私はあなたのために祈っています」とメッセージを送ることです。そうして兄弟たちは励まされます。祈っていることを伝えることです。

（２）必要を抱えている人のために祈るだけでなく、その必要に応えようと行動を為すこと

皆さんはもしかするといろいろな所で様々な必要を聞くかもしれません。それなら、その必要に何とか応えようと行動に出ることです。そして、その必要は物質的なものだけではありません。霊的な必要も当然あります。その人たちのために祈ることであり、そのことをその人たちに伝えることです。

みことばが私たちに教えてくれることは、神に対する愛も兄弟に対する愛もそうですが、そこには行ないがなければならないということです。だから、私たちは彼らに対する愛を、神の知恵をいただきながら実践に移して行くことです。そうして、どうぞ皆さん、あなたがあなたの兄弟たちを愛していることを示してください。「あなたのことを今日覚えて祈ったよ。何か必要があったらそのために祈るから教えて。」と、そのような行ないがその人が神によって救われたということを明らかにしていくのです。ことばだけで愛する者であってはいけない、行ないをもって愛しなさいと。そして、この群れの多くの皆さんがそのように行ないをもって愛してくださっていることを心から感謝します。なお、そのように歩み続けてください。主を愛する者として、兄弟への愛を形をもって示してください。そのときに、主が喜ばれるだけでありません。あなたの主に対する愛は周りの人たちに明らかにされるのです。そのことを主が望んでおられます。

《考えましょう》

１．神が喜ばれない「怒り」を私たちが抱いてしまうのはどうしてでしょう？
２．なぜ、兄弟を愛することが神を愛することになるのでしょう？
３．うわべではなく、心から主を愛する者となるため、また、そのような者として成長するためにはどうすれば良いとあなたは思われますか？